



**Data**

監督・脚本: イ・ジュヨン  
出演: イ・ビョンホン/コン・ヒョジン/アン・ソヒ

---

---

---

---

---

---

---

---

### ■■■ショートコメント■■■

◆公式ホームページによれば、本作の「イントロダクション」は次の通りだ。

**イ・ビョンホン、  
静かなる感情表現で観客を圧倒する“演技神”!**

大ヒット映画『MASTER マスター』『密偵』や、ハリウッド超大作『マグニフィセント・セブン』『G. I. ジョー』のイ・ビョンホン待望の主演作。今やその名を挙げただけで作品への期待と信頼が生まれる国際派俳優が、近年演じてきた悪の魅力や激闘アクションを完全封印。複雑な感情を言葉ではなく表情や視線に映し出し、高い演技力と幅広い表現力をあらためて立証する。「10年ぶりに素晴らしい小説を読んだかのような、心に深く響く作品」と語り、これまでの華々しいフィルモグラフィにまたひとつ“特別なラブストーリー”が書き加えられた。

主人公の妻を演じるのは、ドラマ「主君の太陽」「大丈夫、愛だ」などで“ラブコメ界のクイーン”と呼ばれる一方、映画『女は冷たい嘘をつく』でミステリアスなキャラクターにも挑戦した人気女優コン・ヒョジン。そしてストーリーに大きな衝撃をもたらすキーパーソンには、韓国で大ヒットし、日本でも話題沸騰の映画『新感染 ファイナル・エクスプレス』の女子高生役で一躍注目を浴びたアン・ソヒが好演する。

**名匠イ・チャンドンが脚本を監修、  
俳優ハ・ジョンウの映画会社が制作**

「2012年ミジャンセン短編映画祭」の受賞経験を持つ新人監督イ・ジュヨンが、自身の脚本をもとにメガホンを取った長編監督第1作目。尊敬するイ・チャンドン監督のもとで8ヶ月間にわたりシナリオを練り上げていくチャンスに恵まれ、ハ・ジョンウが代表を務め

る映画制作会社パーフェクトストームフィルムが初の長編映画として制作を決定。さらにイ・ビョンホンの所属事務所が制作費を出資するなど、イ・チャンドン×ハ・ジョンウ×イ・ビョンホンという韓国トップレベルの映画人による奇跡のコラボレーションが実現！「オーストラリア韓国映画祭」招待作品に選ばれたほか、「釜日映画賞 新人監督賞」にノミネートされ、大作映画に一步も引けを取らない見応えある存在感を印象付けた。

## 韓国映画史上初となる壮大なオーストラリア・ロケーション

ソウルからシドニーへ、主人公の人生は国境を越え思わぬ展開を見せていく。大ヒット映画『ベテラン』『国際市場で逢いましょう』に参加して手腕を磨いたキム・イルヨンが撮影監督を務め、人と景観との距離感にポイントを置き、感情を代弁させるキャラクターの“視線”の高さをスクリーン上に再現する。また、観光客に人気のランドマーク「ハーバーブリッジ」と「オペラハウス」内部における撮影は、オーストラリア映画でさえ過去10年間撮影許可が下りなかったという厳しいなかで実現させたことは韓国映画初の快挙となった。

◆公式ホームページによれば、本作の「ストーリー」は次の通りだ。

### すべてを失った。

### 家族も友人もそして自分自身までも——

証券会社の支店長カン・ジェフン（イ・ビョンホン）は、英語教育のため息子と妻スジン（コン・ヒョジン）をオーストラリアに留学させ、自分は家族のために仕事に励んでいた。そんななか、会社が膨大な不良債権を出した末に破綻。安定した収入も、社会的地位も、人としての信用も、一瞬にして失ってしまった。虚しい心の穴を埋めるかのように、家族が暮らすシドニーの家を初めて訪れたジェフン。だがそこで見たものは、隣家の男性と親しく過ごす妻の姿。ショックのあまりその場から立ち去った彼は、これまでの人生に思いを馳せ、やがて残酷な真実と向き合うことになる……。

◆近時『グッド・バッド・ウィアード』（08年）（『シネマルーム23』122頁参照）、『王になった男』（12年）（『シネマルーム30』89頁参照）、『インサイダーズ／内部者たち』（15年）（『シネマルーム37』66頁参照）、『マグニフィセント・セブン』（16年）（『シネマルーム39』296頁参照）等で次々と良い味を見せ、国際的大俳優に成長している韓国のイ・ビョンホンが、全く異質の本作に、ほぼ全編出ずっぱりで主演。アクションは全くないうえ、セリフも極端に少なく、表情や視線だけで主人公カン・ジェフンの人物像

を表現したが、さてその出来は・・・？

中盤はストーカー（まがい？）の行動がずっと続くから、いい加減うんざり。そして、ある時点で、あっと驚く「仕掛け」が明らかにされるからそれに注目だが、そのネタバレは厳禁！

◆銀行ですら倒産する危険がある世の中だから、カン・ジェフン（イ・ビョンホン）が支店長をしていたある金融機関が倒産したのもうなずける。しかし、それによって損失を受けた顧客たちの、支店長以下の幹部たちに対する罵詈雑言のあり方は日本とは全然違うもので、そこにも韓国特有の文化を見ることができる。もっとも、本作がそれを描くのは導入部の入りのためだけで、本作のほとんどは、1人飛行機に乗ってやってきた、妻子が語学留学しているシドニーが舞台となる。妻子だけで大きな軒家に住んでいることにもビックリだが、いくら背広姿とはいえ、変な男（？）が家の周りをうろついていれば、お隣さんが用心するのは当然だ。にもかかわらず、妻のスジン（コン・ヒョジン）が子供ぐるみで、ある男性と親しく過ごしている姿を目撃すると、ジェフンのストーカー行為は日増しにエスカレートしていくことに・・・。

◆他方、ジェフンはふと入った中華料理店で、韓国人の女子学生ジナ（アン・ソヒ）が「ある事件」に巻き込まれるのを目撃し、否応なくそれに付き合わされることに。しかし、もともと「ある事件」が変なら、この女子学生も変。米ドルを韓国ウォンに両替するのに、今時の留学生が闇のルートを使うの？しかも、この女子学生はオーバーステイのため、自分の被害を警察に訴えられないとのこと。それなら、なおさら一介の旅行者に過ぎないジェフンが何の手助けも出来ないのは当然だが・・・。

◆ずっとジェフンのストーカー行為ばかり続く本作は多少飽き気味。そのため、あくびしながら見ていると、少しずつ変な雰囲気が漂ってくるのがわかる。病院に入院している友人の男の妻の病室にジェフンが堂々と入り込んだり、交通事故で急遽入院した息子の部屋でジェフンが息子に面会したりと、英語を自由にしゃべれるジェフンの行動は矢継ぎ早だが、意外にその存在感が薄いののが気がかり。息子は父親がお見舞いに来てくれたと大喜びだが、夫はまだソウルにいてと思っている妻のスジンはそれをまともに取り合わないところも何かへん。しかし、夫に電話しても全く電話口に出ないのは一体なぜ？スジンはソウルのマンションの管理人にカードの暗証番号を教え、中に入ってくれるよう依頼したが・・・。

◆かつてブルース・ウィルスが主演した『シックスセンス』（99年）は「ある秘密」をネタにして大きな話題を呼んだが、本作には何となくあの時と似たような雰囲気がある。しかして、本作後半に見るあっと驚く展開とは・・・？

2018 (平成30) 年 2月 19日記